



復刊 91号

水辺の花菖蒲と蝶

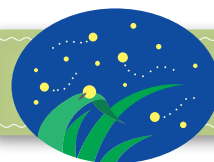
春から夏の境内は次々に花が咲き、さまざまな鳥が鳴いて、まさに浄土を思わせる。新緑に降る雨もまた風情がひとしお。やがて初夏の水辺を花ショウブが彩る。参道脇の池のほとりに群生して咲く姿は、水辺が恋しくなる季節の到来を実感させる。

菖蒲湯に使われるショウブは別種だそう。他にもあやめ、カキツバタと似た花があり、見分けが難しい。優秀つけがたいことを言う「いずれがあやめかカキツバタ」は、見分けが付きにくいことも意味するという。

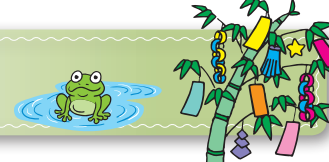
花の写真を撮っていたら一匹の蝶がとまった。詳しい人に聞いて「モンキアゲハ」とわかった。南方系の蝶で、国内最大級のアゲハチョウとして、主に西日本の沿岸地域に生息する。近年温暖化のせいか北限の生息地が日本海側では新潟県まで達しているとのこと。そういえば今年、ことのほか暑い日が早くから続いている。

黄菖蒲の黄映る水平らかに 池内たけし

妙たえの光ひかり



行事案内



関東地区お盆参り

7月初旬

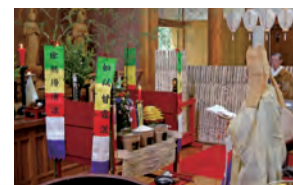
関東地区の檀徒宅に、お知らせのうえでお盆のお参りに伺います。



お盆参り、施餓鬼法要

8月1日(土)

午前6時～10時 墓前の読経受付
午前10時30分 安穩廟法要
同 11時 本堂で施餓鬼法要と新盆法要
昼 12時 おとき
午後1時 法話



新盆法要～今年新盆にあたる方～

ご希望で8月1日(土)か2日(日)

檀徒で新盆のお宅は直接ご案内のうえ、全ての精霊のお位牌を安置し、ご供養します。
檀徒以外の方の新盆用供養もお受けしますので、お問合せ下さい。

お盆棚経

8月初旬～16日

旧新潟市内、県内遠隔地は、ご連絡の上で8月初旬から。近郊のお宅は従来の日程で伺います。予定を知りたい方、お留守になる方は8月1日以降にお電話ください。



岩屋七面様祭

8月19日(水)

午前10時、本堂にて法要とお加持。岩屋に移動して法要。
お昼にお赤飯のご供養があります。ご自由にお参りください。



万灯のあかり—妙光寺の送り盆—

(第26回フェスティバル安穩)

8月22日(土)

どなたも参加いただけます。
詳細は別紙パンフレットをご覧ください。



秋季彼岸会法要

9月23日(水・祝)

午前10時30分 安穩廟法要
同11時 本堂にて彼岸会中日法要
昼12時 おとき
午後1時 住職法話
予約不要ですので、自由にお参りください。



月例信行会

毎月第一日曜日

午前7時～9時 予約不要
会費千円(当日賽銭箱にお願いします)
お参りと法話、軽い作務、朝粥の朝食やコーヒータイムもあります。



月例ボランティア

毎月15日

午前9時～11時 午後1時～3時
清掃作業等。
※7月は15日と26日の2回行います。両日とも「送り盆」準備作業で、灯籠と大蓮づくりです。7月は、午前午後通して参加して下さる方には、昼食を用意しますのでご一報ください。



お寺でヨガ

■夜コース(毎月第2土曜日) 19:00～20:15
7月11日・8月8日・9月12日・10月10日
■昼コース(第3木曜日) 14:00～15:15
7月16日・8月20日・9月17日・10月15日
■参加費：一回700円
■持ち物：ヨガマット、もしくはバスタオル
■講師：ノリコさん



どなたでも参加できます。ただし予約制ですので、その都度電話での連絡をお願いします。



あとがき

今号のインタビューでは、「妙光寺の昔」について平均年齢85歳の檀徒の皆さんからお話をうかがいました。文字数の関係で載せられませんが、「お盆の菰づくり」のお話なども出て、ちょっと昔の丁寧な暮らしを感じました。「菰」と聞いてすぐわかる人も少なくないでしょう。もっとも私自身も、作り方では知りませんでした。勉強になりました。(新倉理恵子)



お寺を訪れる方々

悲しみの席で

ゴールデンウィークは好天が続き、来訪者が沢山ありました。数年前の『水と土の芸術祭』で初めておいでになった市内の女性が、今回は鹿児島からの友人を案内して来られました。その友人が「お寺が好きで色々歩きましたが、ここはとても良い「氣」が流れていますね。」と言ってくれました。

「氣」は説明しにくいのですが、爽やかで神聖な空気感もあり、大地から伝わるエネルギーともいえるようです。妙光寺は「氣」が強いと度々言われます。

静岡の40代の男性から「急に思い立って父と弟の墓参りに来ました。以前に比べ妙光寺が立派になり、ご前様が遠い存在になったようです。え！近々引退なさるといのは、私らの話をもっと聞きたいためなのですか。嬉しいなあ、楽しみです」と思いがけない言葉を頂きました。

身近で数居の低い妙光寺でありたいと思っているのですが、なかなかうまく伝わりません。

かなり前のこと、「父親が亡くなりまして。町内の方のお通夜でご住職に接して以来、我が家も妙光寺さんにお願したいと決めていました。」男性からの電話でした。以来しばしば伺っていたのですが、先日お母さんが90歳で亡くなられたのです。

ご自身も病気で、車いすでした。お通夜振舞いの席でその方が「ウーン、俺の葬式もご前様にこうしてお経を読んでほしいなあ」とつぶやいたのです。ドキリとして返す言葉もなく、ありがたい思いでいっぱいでした。

5歳の女の子の葬儀は、辛かったです。人形のように可愛らしい姿に、ご家族の悲しみを察するに余りあるものがありました。葬儀の数日後、若い母親か

ら「お通夜での法話が身に染みしました。お話されたときの原稿がありましたらもう一度読みたい」と電話があり、お届けしました。

若い人たちと

母子家庭の若い親子が、両親の死で同居していた県営住宅に住み続けられないとの話を伺いました。居住は特例で認められたものの、県内在住の保証人が必要なのだそうです。頼れる親戚もなく、姉は県外に嫁いでいます。「お姉さんに妙光寺に迷惑かけないと一筆書いてもらえば、私が保証人になるよ」と話したら、よほど心細かったのでしょう、姉妹で泣き出してしまいました。住職のできることはこの程度です。ある講演で日本人の死生観について話しました。参加していたという40代の

男性看護師が、後日訪ねて来られました。彼曰く「総合病院に勤務していますが、人間が最期を迎えるところとしては今の病院はあまりに寂しい。不要とも思える治療も多く、苦しみを増しているようです。家族も含めて、もっと皆さんが死の迎え方を考える機会が必要ではないかと悩んでいます」と。そのためには良い生き方が大切だと思います。一緒に考えていきましょう」と、数時間語り合いました。

お寺でイタリアン

お寺が好きという若い世代が増えていきます。県内で活躍が話題になっている若手料理人たちから、妙光寺で料理の腕を奮いたいと頼まれ、1月に客殿がレストランになりました。これが盛況だったのです。

そこで8月の送り盆は『お寺でイタリアン』と称して、交流会の中心料理を彼らにお願いしました。料理人のひとりは「妙光寺の仏像が好きで、よくお参りに来ています」と話してくれました。不思議なご縁です。皆様もぜひご参加ください。

仏弟子として

身延山団体参拝旅行には2回参加、七面山も登詣している。また、春と秋に行われる1日研修会にも数回参加し、お寺で泊まりがけの研修をしたこともある。昨年10月には、夫婦そろって生前法号（戒名）を受けた。今春は、妙光寺主催のインド仏跡参拝旅行にも参加した。お釈迦様の地インドに、一生に一度は行きたいと思っていたという。お釈迦様が『法華経』を説かれた霊鷲山では、不思議と昔来たことがあるように思えた。それほどの安らぎを感じる場所だった。そして、機会があれば、是非また仏教にゆかりの深い他の国々にも出かけてみたいと考えている。

先日、ご前様に曼荼羅御本尊を書いていただき、開眼供養もしていただいた。

今は神奈川県とアメリカにいる2人の孫の活躍が、楽しみである。

願い

木内さんは、妙光寺にお墓のある方は、せめて年に一度はお寺の行事に参加してほしい、と言う。そして自らの終の住処となるお寺のことに、もっと関心を持って、知ってほしいと願っているのである。「ご縁のある方には、是非お寺に足を運んでいただきたい」と熱く語ってくくださった。（鎌田記）

木内春雄さんは長野県飯山市の生まれ。飯山北高校を卒業して、電電公社（当時）に就職、新潟県十日町市に赴任した。24歳の時に、同僚で6歳年上のヒサさんと結婚し、ひとり娘の聡子さんが生まれた。長い間単身で県内各地をまわり、45歳のとき新潟電話局に赴任した。そのとき家族で新潟市内の社宅に移り、その後平成2年に現在地に自宅を建てた。

妙光寺とのご縁

娘の聡子さんが県外に嫁ぎ、後継ぎの心配をしていた頃、新聞で安穩廟の記事を読み、お墓を求めたのが妙光寺とのご縁の始まりである。以来、フェスティバル安穩、（送り盆）に幾度も参加し、お大会には仕事を休んで参拝するようになった。

15年前からフェスティバル安穩、の会計担当となり、細かい出納に頭を悩ませている。苦勞も多いが、参加者やスタッフが楽しんでいる様子を見ると、やりがいを感じるそうだ。

退職後は警備受付業務に就き、ビル管理に係る様々な資格を取得した。根っからの努力家である。お寺では、安穩会員から妙光寺檀徒となり、世話人も9年間務めて今春定年を迎えた。元旦から始まる行事の受付も担当し、顔見知りも増えた。



安穩会員から檀徒に

新潟市東区粟山

木内春雄さん(76歳)
ヒサさん

妙光寺懐かしい日々

妙光寺は一昨年、開創七百年を迎えました。大きな節目を迎える中で、本堂改築以前、そしてご前様も知らない少し昔の妙光寺のことを、うかがってみたいと考えました。夏の「送り盆」では「昔の妙光寺写真展」も企画されています。そこで展示する予定の写真数葉を眺めながら、四人の檀徒の方々にお話を聴きました。



この写真は、戦前でしうつか？
春先だから、ご判様の写真ですよ。

石田チイ（以下チイ） 羽織の丈も長いし、これは戦前でしょう。戦後も『妙光寺のご判様』という、この辺りの若い人が皆集まってきました。私の実家は一向宗（浄土真宗）だけど、姉たちはおしゃれして妙光寺に出かけたものでしたよ。

小林 4月27日の朝から始まって、一晩皆でお寺に泊って、28日の午後3時頃までやってたわけだから、「ご判様」は大きな行事でした。昔はご判を船で運んだそうだけど、それは私も記憶にないですね。私が覚えている時は、もう岩場の道を歩いてトンネル出口でご判を受け渡してた。いつごろから、やってた行事なん

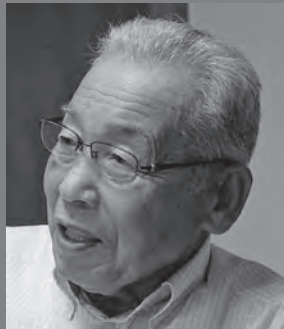
昔の妙光寺を知る檀徒の皆さんに聞くー

でしうつか。

石田誠太郎（以下誠太郎） そもそもは、日蓮聖人が遠藤氏に下された『ご妙判』（日蓮聖人の印鑑）を、年一回五カ浜の遠藤家から妙光寺に運んで、ご開帳する行事なわけだけど、寺の文書によると一八〇二年（享和二年）の3月に「ご判をお迎えに行く」と書かれているのが、最初の記録ですね。江戸城での「出開帳」も三度行われています。一番古いのが、



大滝リュさん (87歳)
数年前まで畑に出ていた。亡き夫は総代だった。息子は現総代大滝剛さん。



石田誠太郎さん (85歳)
現役時代は中学校教師。フェスティバル安穩、初代事務局長。妙光寺の古文書についても、造詣が深い。

四代家綱（一六五一〜一六八〇）の時です。から、三百年以上昔のことです。明治時代までは、ご判を五カ浜から、船で運んだよつです。
チイ 紺のいい着物を着ておしゃれをして、遠くから歩いて来るので地下足袋を履いてきて、お寺で下駄に履きかえて、遊山だったよね。

で遊んで、心が晴れやかになること」
誠太郎 農家は筋時が終わって、だっくらした時期で、「草餅持って、角田のご判に行こう」という風でした。会社も休みになるし、学校も半日休みで、宗派に関係ない地域のお祭りだったんですね。
二日がかりで、何をしますか？

小林 稚児が出て、お寺さんもたくさん来て、都合3回、法要をするんです。夜は一晩皆で本堂に泊って、説教を聴きます。三百人からいるので、ぎっしりですよ。「角田の通夜説教」と言ってる。眠気覚ましにお札を買いに来るからお札の係は起きてるし、岩屋にもお参りに行くから岩屋の当番もいました。一度岩屋に一人



小林雄以さん (90歳)
現役時代は農協専務を務めた。元総代。



石田チイさん (78歳)
農業の現役。今も毎日畑に出ている。

ど、お菓子は珍しいからねえ。
妙光寺は近年すっかり整備されましたが、昔はどんな風でしたか？

小林 一番古い建物は、山門ですか。昔のままですよ。

誠太郎 山門は一八一五年（文化12年）建立です。建替え前の本堂は、一七六四年（明和元年）の建物でした。「角田山御歴代控」という遠藤家の当主が、一八一〇年（文化7年）に書いた文書に、「二七六四年、本堂の棟上式をした」と記されています。この寺は江戸時代の50年間に、2度火事で焼けているんです。

一七〇八年と一七五六年の2度ね。だから、一七六四年に本堂を建てた時は、お金がなかったんでしょうね。以前の本堂は、かなり粗末な建物でした。彫刻もろくなかったしね。

小林 昔の本堂は今の題目堂の所にあつたと聞いてますが、一七六四年の本堂は、向こうに建てたんですか。
誠太郎 それはわかりません。位置までは、書いてないですよ。

排水の工事をするまでは、幾度も大水にあっているんですよ。



大滝 ここは大雨になるとよく水が出て、以前は本当に大変でした。

チイ 雪どけ水が出る時期は、本家のじいちゃんを背負って水の中を歩いて、やつと寺に辿りついたと主人に聞いたことがあります。

誠太郎 明治の初めは寺子屋がここにあって、「風が吹くと砂が飛んで子どもが困るから小学校を建ててほしい」という陳情の書類が、区役所に残っているんです。その頃は水が出ることはなかったようです。でも戦後は、何度も水害に遭っています。この寺は、低い所にあるんです。大滝 だけど、どこも全体に、地面が高くなってるよね。昔は腰掛けられた所も、座らなくなってるもん。

誠太郎 ああ、寺が低いんでなくて、周りが高くなってるのか。とにかく、ご前様が住職になられてから、この寺は工事の連続でした。

小林 でもきれいになって、本当に良かったです。うれしいですよ。貴重なお話をたくさん聞かせて頂き、ありがとうございました。（聴いた人 編集部・新倉理恵子）

次に、八月一日のお盆について、教えてください。

チイ 裏縁側の方に升潟地区の人の部屋があつて、そこで本家が持ってきてくれたお昼を皆で食べて、子どもたちは一日中海で遊んで、楽しかったねえ。

小林 地区ごとの部屋割は、お寺の決めでなくて、自然にああなつたんだね。巻地区は、祖師堂に当時は畳敷きの床があつて、いつもそこでした。

チイ お嫁に行った人もその部屋に行けば、実家の人たちや地区の皆に会えるんです。まだ暗いうちから牛車に荷物を一杯積んで、出かけました。焼酎の煮付けやこんにやくの煮付けや…。昔は、お寺のお齋はなかったんだね。

小林 あの人数じゃ、お齋は無理だて。子どもが海水浴に行つて一日中帰って来な



受付係の役員さん(上)と、台所で「おとき」を手作りする当番の女性たち(下)。いつもご苦労様です！



良恵沙弥修行中！

身延山の信行道場で修行中の良恵沙弥。7月には正式な僧侶として戻ってきます。



春の一日研修 5月24日 ㊤

今回は初級コースのみで6人の方がゆったりと仏事について学びました。
この春と秋の研修会もすでに5年目となり、のべ170人の方が受講しています。



御輿に乗った「ご判」が本堂へと向かいます。高校生の奈央さんや、お稚児さんも加わり、華やかなお練りでした。



今年のお稚児さんは17名。例年になく大勢で、とても賑やかでした。



池の上の東屋で、妙光寺お茶クラブによる「野点の会」が催されました。

だいえ お大会 4月29日 ㊤

通称「ご判様」は、日蓮聖人の遺されたお手紙と印鑑の写しを御開帳するお祭りです。澄み渡る青空と満開の八重桜の下で開催されました。



ご宝前に安置されたご判を前に、本堂ではしめやかに法要が営まれます。



100日間の荒行をおえた修行僧の水行。

寺のうごき 春

春のお彼岸 3月21日 ㊤



手づくりの精進料理も楽しみのひとつ！

消防車のお祓い

新車のご祈祷は多く頼まれますが、さすがに消防車は珍しい！



年会費

年会費の納入をお願いします。遠隔地の方には、郵便局の振替用紙を同封しました。周辺地区の檀徒宅には、地区世話人がお伺いします。8月末までに納入してください。

※お盆の施餓鬼法要塔婆、送り盆の献灯も一緒にお願いします。

役員改選

妙光寺は世話人と呼ぶ定数24名の役員の合議で運営しています。その中から互選で総代3名を選出し、住職



とともに執行役員となります。

世話人は任期3年75歳定年制で、今年が改選期です。6月21日に、女性役員も3人に増えて新役員体制で今年度がスタート。妙光寺の全ての収支決算等を審議しました。

『浄土基金』

昨年からお願ひしている『浄土基金』が、申込総額47,362,384円になりました。支出は昨年の客殿屋根改修工事の25,268,000円で、申込現残高は現在22,094,384円です。今後住職交代に伴う事業計画を中心に支出予算を計上し、その都度ご報告いたします。引き続きのご協力をお願いします。

檀徒用安穩廟

従来の墓地にお墓を持つ檀徒の中で、継承者不在を心配する方の相談が増えています。そのための『檀徒用安穩廟』が完成し、随時受付中です。詳しくは直接ご相談ください。



秋の主な行事予告

お会式と生前戒名授与

日蓮聖人のご命日法要を、お会式といいますが、これに併せて生前戒名の授与を行います。今年は11月8日(日)を予定しております。詳しくは次号でお知らせします。



完成した『檀徒用安穩廟』

『長崎原爆写真展』

今年は戦後70年にあたります。改めて原爆の悲惨さと平和への祈りを込めて、10月31日～11月8日に『長崎原爆写真展』を妙光寺で開催します。期間中に、辻幹雄11弦ギターコンサート、山崎真さん(77歳)のトークを予定しています。こちらも次号でお知らせします。



「火葬場の少年」ジョー・オダネル



昨年の生前戒名の授与式

誌上法話

小川英爾

「教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し、
五体を地に投げ、合掌して両眼を開き、尊容を拝し、
歓喜身にあまり心の苦しみたちまちやむ

日蓮聖人『忘事経事』

分骨の習慣

新潟の葬儀では、火葬後に遺骨を大小2つの箱に分けて持ち帰ることがよくあります。お墓に埋葬する段になって「どうすれば」と相談を受けます。なかには「折角だから小さい方はもう少し手元に置いて語りかけたい」と言われることもあります。関東などほかの地域では、申し出ない限り遺骨箱は1つです。

本山納骨

これは本山の身延山に分骨を納める習慣が古くからあったためです。浄土真宗なら本願寺となり、各宗派共通の習慣でした。これを本山納骨といい、そのための分骨の習慣が残っているのです。

鎌倉時代、母の遺骨を抱えて身延山を訪れた富木氏は、日蓮上人に読経していただいて、納骨をしました。冒頭の一文は、千葉に帰った富木さんに、日蓮聖人が送ったお手紙の一節です。

「お釈迦様のお像の前に母親のお骨を安置し、ひれ伏して手を合わせ両眼でお釈迦様のお姿を拝した時、あまりの喜びで母を亡くした悲しみがたちまちやみました」と言う富木さんの母親へ孝養に感激し、母の成仏は今のあなたの成仏であり、あなたの喜びが母の成仏にいたるものと説かれました。

本山への納骨はこの時代からあったわけで、佐渡の藤九郎守綱という信者も、佐渡流罪の日蓮聖人をお世話した父・阿仏房の遺骨を身延山に葬りました。当時の大変な道のりを歩いて身延山に詣でたのですから、強い信仰心が感じられます。以前よりは少なくなりましたが、現在もこの本山納骨制度はあります。

遺骨への想い

昨今の分骨は「若くして亡くなったお嫁さんを生家の親の墓に」といった例などに見られます。この場合も、あるいは本山納骨の際も、「お骨を分けるなんてあの世で成仏できない」と反対する声が親族から出ることがあります。しかしお釈迦様の遺骨は分骨され世界中でお祀りされているのですから、心配無用です。遺骨は故人を偲ぶ「よすが」の一つと考えていいでしょう。

戦後70年を経ても、海外の戦地には未だに放置されたままの戦没者の遺骨が沢山あります。とても悲惨なことです。一方で海や山に遺骨を撒くという撒骨も広がりました。故人への想いを込めて丁重に撒くなら理解もできますが、一部には墓を持ちたくない事情もあると聞きます。同じ撒骨でも意味が全く違ってきます。

大切なことは富木さんの想いに通じる、故人に対する懇ろな弔いの精神です。弔う側に安心と喜びの気持ちがあることが、故人の安らぎに通じます。鎌倉時代も現代も変わらないはずだと思います。

「変化の良し悪し」

15年ぶりに古い友人夫妻が訪ねて来ました。住職とは私より古いお付き合いのある友ですが、15年の間に本堂も、京住院も、境内も大きく変わったことにとっても驚いていました。昔の古くて汚いけれどどこかまったりとした台所で、料理の先生でもある彼女に子供たちとともに色々な料理を教わったことを懐かしく思い出しました。

まだ15年しか経っていないのに妙光寺は大きく変化しました。住職を含めたったの4人で寺を運営していたのが、今は倍の8人の職員をかかえるまでになったのです。ご前様とは夫であることには変わりがないのに、いつしか仕事の話ばかりです。妙光寺のこれからや運営のことが、食卓の主な話題になりました。長女が後継住職に手をあげ修行にはいったことも、三女が寺で働くようになったことも当時は想像もしなかったことです。

お寺にたくさんの人々に来ていただこう、と努力も積んできました。社会に恥ずかしくない、しっかりとした寺の運営についても腐心してきたつもりです。昨年から事務のシステムの見直しに取り組みはじめています。お送りした会員台帳の確認もそのためでした。これにより、会費の納入に対するお問い合わせや墓地の管理など今よりスムーズになると思われます。

努力をしても間違いは起こるもので、先日も事務手続き上あってはならない間違いが起きました。申し訳ない気持ちでいっぱいです。少しでも疑問があったり、おかしいと思ったりしたら、お問い合わせください。そして出来たらお寺に時々はお参りに来ていただき、ご自分のお寺という心で確認していただければ幸いです。

「妙光寺浄土化計画」に多くの方からご賛同いただき、ありがとうございます。そして私たちが700年の歴史をどのように守るのか、そもそもみんな今の時代にどんなお寺を求めているのか、ご意見下さい。

寺の運営は変化とともにますます煩雑かつ多様な仕事のがしかかり、またこの美しい寺を維持管理するにはお金も人手も必要です。けれども寺の収入は不安定で、人件費の削減、無駄を省く努力をしても寄付に頼らざるをえない部分も多いです。

「変わりゆくこと」はわくわくして大好きなのですが、最近は身体が老化してきたのか、ちびっと辛く感じることも…。昔はよかった！なんていうつもりはありませんが。とりあえず変化しつつ、いい感じのお寺を目指さなければなりませんね。



質問

女性住職は、多いのでしょうか？

女性が活躍する寺へ

そもそも寺に集まる檀信徒の多くは女性です。女性の悩みを聞くのも、尼僧の方が向いているでしょう。瀬戸内寂聴さんは有名ですが、無名の方でも活躍する方はかなりいらっしやいます。

一般社会同様、超えるべき壁はあるものの、女性住職が一般的になる時代は近く、そのとき寺はもっと変わるでしょう。

しかし、宗教界も少子化で男性不足なのと、一般社会同様元気な女性が増え、檀信徒の理解も進み、妻や娘が寺を継承する例が増えています。神主の世界も同様だそうです。



これから増えていくでしょう

歴史的にお寺は「男中心社会」でした。女性は尼僧と呼ばれ、住職になれるのは尼寺として皇室に繋がる門跡寺院か、大寺院に付属するような小さな寺に限られてきました。

そもそも出家者は男性が圧倒的に多く、僧侶は妻帯しなかったので、住職は男性が当然でした。明治以降僧侶の結婚が公認され、寺に女性が住むようになりましたが、それでも後継住職は息子が婿養子という考えが続いてきたのです。(浄土真宗は別です)

良恵の修行日記

第2回

修行に行ってください！

私は今、沙弥(しゃみ)という立場にいます。得度(出家)はしているけれど、一人前のお坊さんではない、いわゆる小坊主です。

日蓮宗では、身延山にある信行道場での修行を終えることで、僧階を授与され、正式に僧侶となることが出来ます。この修行期間がどのくらいなのか、皆さんはご存知でしょうか？ 答えは35日間：意外に短いでしょうか。ちなみに他の宗派では一週間だったり、数年だったり様々なようです。



最近話題のテレビ番組「ぶっちゃけ寺」にも、身延山の信行道場を出たばかりの尼僧さんが出演されていました。数カ月後の私の姿などと、見ていて妙に緊張してしまいました。——なんて、実はこの原稿を書いている今、まさに身延に出発する直前なのです。『妙の光』が皆さんのお手元に届く頃、私も小坊主を卒業出来ている…はずです。道場の中でどんなことをしたのかなど、またお話できる機会があれば…と思いつつ、行ってきます！